

倉敷市立短大 ○岡本洋子 美作女子大 田口田鶴子 山陽学園短大 小川節子

【目的】本報では、大学生女子を対象として「子ども時代の食生活調査」、「Y-G性格検査」、「味覚閾値検査」を行って、それらの相互関係について検討し、子ども時代の食事のあり方が現在の味覚感度ならびに性格特性に影響を及ぼすか否か調べることを目的とした。

【方法】年齢18～22歳の大学生女子100名について、「子どもの頃どのような状況で食事をしたか等の食生活調査」、「Y-G性格検査」を行った。また甘、酸、塩、苦、うま、辛味物質の等差濃度水溶液を検査試薬として全口腔法により上昇系列で感受下限閾値を調べた。

【結果】(1)食生活調査では、「家族と共に会話をしながら」「おいしく」「落ち着いて」「既製のそうざい、調理済食品、即席調味料ばかりでなく手づくり料理のある食事」等の項目で4.50以上(5段階評定)を示し、子ども時代によい食生活を送ったことがうかがえた。これらの調査得点を変数として主成分分析を行った結果、第1主成分(固有値6.43)はいずれも0.25前後で、子どもの頃の食環境を考えるうえでその項目がどのくらい影響を及ぼすかを表す因子と解釈され、「母親の料理好き」「おいしく」の項目で高い値(0.29)を示した。(2)上記6味については、低い濃度で感受した群と高い濃度で感受した群の間には食生活調査得点の差はほとんど認められなかった。(3)情緒安定群、社会適応群は情緒不安定群、客観性・協調性欠如群に比べ、食生活調査得点は高い傾向を示し、子ども時代の食環境が現在の性格特性に影響を与えることが示唆された。